

## サークル紹介

### サインはV!

#### 石織株式会社・バレーボール部

バレー部が誕生して7年目。部活動を続けて部員の技と体力の向上を目指して努力されてきた、中田監督と桐谷キャプテンに話を聞く。

バレー部の結成のきっかけは、当時野球部しかなくて、それからはみ出た者同士が、女性を混じえて、楽しくやろうと練習を始めたのがきっかけらしい。今では、女子6名、男子16名の部員数で、市の勤労者大会、市民体育大会、夜間リーグ対抗など、数多く参加出場して、大いに活動しているそうである。定期的な練習は毎週木曜日の夕方から2時間たっぷり流す汗で技術のレベルアップに励んでいるとの事。



中田監督はまず、部員の気持と動きを把握することに気をつけ、一にも二にもチームワークを整えることに努力するといわれる。もっとも前、中、後衛のコンビネーションはチームワークがないと絶対うまくいかないし、当然目立とうという個人プレーが入るとすぐ乱れるそうである。監督としては、選手に対して「ボールを拾うよりもチームワークだ」という気持が大切ということをして理解させることに努めてきたと言われる。キャプテンの桐谷君は、試合中にはみんなをひっぱっていくことに努め、試合が終わってからは、ゴクロウサン会と称して、全員で反省する会を絶えず持ち、これが意志の向上につながるという。昨シーズンは勤労者大会でベスト8に残れたことを自信に、今シーズンは、賞状1枚を是非手に入れたいし、これを目標に技術面では、フライングレシーブや回転レシーブをマスターし、時間差攻撃、速攻などいろんなワザをとり入れ、強いチーム造りに励むという。

試合の時には選手の家族ぐるみの応援があるそうであるが、明るいムードで練習に励み、チームワークの整った強いチームを目指し、みんなから愛されるバレー部として今シーズンも頑張りたいとの事。大いに期待したい。

### トーナメント、リーグ 両戦で輝かしい優勝!

#### 丸与商事株式会社・野球部

昨シーズン、問屋センター早朝リーグ戦とトーナメント両戦で各社のチームからマークされて、厳しい戦いを勝ち抜き、輝かしい優勝を成し遂げた丸与商事(株)の金子監督と広瀬キャプテンに喜びを噛みしめつつ、これが「丸与の野球だ。」を大いに語ってもらう。

まず、開口一番、優勝を果たした喜びの感想は、監督いわく「メンバーの平均年齢が他チームより高いといわれる高齢化(?)の中で優勝できたことが一番嬉しい」その原因というか、作戦は「監督の采配よりも、むしろ社訓にもなっているチームの和であったと思う」と語る。又、広瀬キャプテンは戦わずして負けることのないようにチームメンバーを試合当日先ず参加できるように、不戦敗を避けることに努めたそうである。

もっともA・B両チームが出来るほど、部員数はそろっている。それだけに個々の選手に応じて全員野球を目指し、細かいシビアな野球をし、同時に個々のものをまとめて、全体の力にすることに意を注いだという。しいて言うならこれが監督としての苦勞でしたと語る。もっとも部員の中には他のスポーツの特技を持っている人が多く、全員がまとめてチームワークになるというのは個人、個人がそれぞれ心得ているとも言われる。又、試合中に自他チームに限らず、いいプレーはいい、悪いものは悪いとして、見て学びとり、そして自らを反省させる気持を真剣にとらせたそうである。プレーに対する気迫は、むしろわがチームに捨身で向かってくる相手チームの方であったと言える。それだけに、全員プレーをさせたいが息を抜けなかったこともしばしばであった。然し、全員には、球に対する馴みを強くするため、試合前に必ず全員ノックをやり、これが練習らしい練習であったという。

昨シーズン、Y社との対戦で、代打でいきなり初球をライトフェンス越えにホームランを打ち、試合の流れを勝ちムードにもっていったのが印象に残っているそうであるが、強い丸与商事のダイナミックな試合運びよりも、今後も細かい野球を目指すそうである。優勝決定戦のO社に勝った時は、名ショートのキャプテン広瀬君も、これでユニフォームが新調できるといったそうである。会社の大きな理解があつてのことであるが、全員のレベルアップを目指し、会社全体の応援をバックに今年も丸与商事の野球チームは大いに活躍されることと思う。



## 協同組合 金沢問屋センター

第18号 1981年1月発行  
協同組合 金沢問屋センター  
発行者 小川甚次郎  
金沢市問屋町1丁目  
電話 37-8585



### 広い視野を持った経営の展開を

協同組合 金沢問屋センター  
理事長 小川甚次郎

皆様、明けましておめでとうございます。早いもので、今年も金沢問屋団地完成14年目を迎えました。学生でいえば中学生であり一番楽しく、思いなやむ時であります。現在の我が国経済も厳しく、なやんでいます。この時だからこそ、企業全般にわたる徹底した見直しをする必要があり、景気退潮が感ぜられる経済環境の下でその推移を十分見極めて無駄のない経営をすることに徹すべきであります。

オイルショック、冷夏、その他諸々の原因による物価高騰、個人消費の低迷など悪条件が重なって、卸業者にとっては厳しい経済環境になっていますが、今こそ私達は、政治、社会、文化等の各分野にわたる多様な情報を収集し適切に分析消化し、消費者に「還元」しなければなりません。

経済成長が低迷すればする程、問屋の役割が重要になると考えております。私の関係しています伝統産業でも、消費者ニーズが刻々と変化しており、それらをいかにして、商品に生かすよう製作側に指導するか毎日検討しております。高度成長の時代と違い、低成長の時代には今まで以上に増して、広い視野を持った経営の展開が不可欠であり、その時代にそった組合員各企業の体質改善と企業努力が大切になります。

「目をシャワーのようにして情報をつかめ」これが私の本年の言葉です。本年も組合員皆様始め、関係各位のご協力を得て組合の共同事業を一層活発に運営したいと考えております。年頭にあたり所感の一端を述べ、皆様のご健勝を祈念して、ご挨拶と致します。



# 北陸の流通の大拠点として益々発展を

## — 昭和56年新年互礼会 —

ここ数年来では珍しく新雪の粧いの中で明けた昭和56年の新春を寿ぎ、協同組合金沢問屋センター恒例の新年互礼会は、1月5日午後2時より、問屋センター会館に於いて、多数の来賓と組合員商社代表の参席の下に開かれた。

本年は特に繊維同業会和装部会の方々が、紋付袴の正装で出席され、いやが上にも新春の慶びを盛り上げた。国歌斉唱の後、年頭挨拶として小川理事長より、私達を取り巻く81年の経済環境は厳しく、それを乗り切るには、一層の企業の体質改善と企業努力が必要との指摘があり、更に問屋センターの事業として、新流通会館の建設計画、又組合員店舗の増築に関して57年度より第二次補完事業として計画したいとの前向きな指針表明が行われた。

次いで各来賓の祝詞に移り、中西知事より「問屋センターが北陸の流通の大拠点として益々発展する事を喜び理事長挨拶の中にあつた補完事業の計画については関係各方面とも相談の上対処したい」 宮太郎金沢商工会議所会頭「経済界の動きも天候と同じく、冬の寒さは酷しくとも春が早く来る事が望ましい。北陸自動車道路の米原迄の開通は県内の産業界に与える影響は大きく、又年末北陸新幹線着工の問題も漸くきざしを見せており、流通業界もこれに対処する様にやってくる必要がある」 森衆議院議員「雪が降ると地域隔差が痛感される。日本海時代、地方の時代といわれるが北陸に価値観を生み出す様に努力する必要あり

又和服振興に関連し日本民族は和洋東西融合の独特の文明を持ち、これを上手にこなしている。この特色は益々伸ばす必要がある」 奥田衆議院議員「新年度予算のゴロ合わせをすると四六時中悩みを抱えた81年となるが、厳しさを腹に据え国際的な金融競争に打ち克ち地場産業の育成に頑張りたい。新幹線問題については地元負担を最小限に押え、夢を浮上させ北陸経済圏の発展に努力する」 島崎参議院議員「世界各国はスタグフレーションの波の中にあえいでいる。高い公定歩合や物価高の中で経済が混乱している。国際収支の問題があつて景気浮揚もはかどらないが、内外共厳しい条件の下で内外に先取りした道標を持つ必要がある。多様化した世の中に対応する為に第三次産業は栄えねばならぬ。この面に於いても問屋センターの持つ価値は大きい」最後に江川金沢市長はユーモアたっぷりの話しぶりで「私達は何時も市民の皆さんの生活に密着した問題を考へている、今日も皆さんと一緒に考える立場でここに入ってきた。今年も一緒に考へ、一緒にやってくる年にしたい」等々の夫々の持味を披露した御挨拶であった。続いて祝宴に移り安田参議院議員の祝電披露、今井県会議員の音頭での乾盃に始つて三廓の美女のお酌で各テーブル共話はずみ、舞台では新春を祝つて長唄鶴の舞の御祝儀もあり、宴ましましたけなわの処、宇野金沢市会議員発声で問屋センターの益々の繁栄を祝つて万才三唱し、本年の互礼会も盛況裡の中に幕を閉じた。



# 年男大いに語る

## 酉年をむかえて



小川株式会社  
小川 甚次郎

年末から降りはじめた雪は、正月の1、2日を除いて毎日のように降り続き、三八豪雪を上まわるといふ18年ぶりの大雪に見舞われた。金沢はまだよとして、福井・富山は金沢の比ではなかったようだ。あらためて自然の恐ろしさと、雪国の厳しさを味わった。それにしても毎日のように雪を見ていると、正月の頃の雪見酒といった悠長な気分でもってもらえるものではない。列車は何日にもわたって不通になり、道路も何度か閉鎖され、その間に飛行機は欠航するといったように毎日のごとく、新聞・テレビで報道されると、金沢はいったいどうなっているのかと心配していただく電話が相次いだ。

雪もひと休みしたので、久しぶりに東京へ出張した。飛行機がアルプスを越えるとそれを境に、重くたれこめていた雪雲が切れて青空が続く。久方ぶりに見る青空と雪のない土地が眼下に広がる。北陸の豪雪がまるで嘘のようだ。

飛行機で感じたことだが、鳥のように青空を飛びたいという、空中飛行へのあこがれは古今東西の人間の夢だったに違いない。鳥のように空を飛ぶ夢を何とか実現しようと、多くの人々がいろんなやり方だめしてきた。それだけに鳥に対するあこがれは強かったと思う。今年はその「酉年」である。人間は古くから鳥と深いつながりを持ってきた。最も馴染みの深いのは鶏かもしれない。夜明けのトキを告げる雄雄しい姿、今でこそめつたに見られないが、子供の頃はよく見かけた。平和のシンボルとされてきた鳩、嵐の空にも勇敢にたちむかうイヌワシ、それぞれの姿に胸を打つものがある。

折から景気は低空飛行を続けている。景気であるがゆえによりときもあれば、悪いときもある。要はよいときに悪いときの対策を考へ、悪いときはどうすればよくなるかを常に考へなければならぬ。鳥を見ているとそれが実によくわかる。鳥の習性を見ていると元気なときには力いっぱい飛び、疲れたときには風に乗りもっぱら水平飛行に依存し、次の飛翔への力をたくわえる。

われわれもそうした鳥の習性から見習うこともときとしては必要である。今年が年男である。不思議なことに酉年であるというだけで、新年から何となく張り切りたい気持ちになる。何度目かの酉年をむかえた今年、健康に留意し水平飛行から再び上昇する、酉年にちなんだそういう年にしたいと念じている。

## 軸との対話



金沢機工株式会社  
井上 三郎

私は学生時代に覚えた囲碁を不惑の年令を過ぎてから再び始めました。もとより今に到るも大した腕ではなく、ひまを見つけて仲間とザル碁に興ずるのが、楽しみの一つでもある。囲碁のもつ魅力は、構想を練り、着手し、少しづつ優勢を確立してゆくプロセスそのものであり、好きなのは、企業経営と一脈通ずるせいかも知れない。山あり谷あり、まさに人生そのものといえます。

いつの頃からか「布石の妙」なる言葉が好きな言葉の一つとなり、数年前、日頃親しくさせていただいている島崎(働)の会長、つまり書道家の南海先生に所望して、「布石の妙」なる掛軸を書いて戴いた。それは先生一流の味わいのある作風で、一生大切にしたい軸でもあります。

時折掛けて、独り静かに、過ぎ越し方、或いは行末に想いをやる時、それは常に私に勇気と励ましを与えてくれます。

今年も早々に屠蘇を祝いながら、此の軸と対座し、教を乞うた処に依れば、次の様であった。

今年は昨年にも増して、多難な幕明であり樂觀を許さない従来からの問題の他に、新たに円高問題、増税問題等々が加わり、客観状況は一段と厳しい。しかし、もの事は暗く見れば限りなく暗く見え、明るく見ればこれ又限りなく明るく見えるものである。

全て明暗二面があるわけで、要は対処次第でピンチもチャンスに通ずるではないか。

今こそ布石の妙を経営に発揮して頑張りなさいよ…と語りかけてくれました。

という次第で、今年はどうな年であれ、軸の教えに従いつつ、明に立ちつつ、暗を忘れずの心構えで、この多難とされる81年を、酉年よろしく大いに羽ばたき、クリヤーする事としたい。



\*\*\*\*\*



# これからの日本経済と課題

金沢経済大学教授  
奥村 実

\*\*\*\*\*

今年の日本経済の予測は近來、珍しい程一致している。「前半低迷、後半回復」「まあまあ、昨年よりは少しまし」「輸出はきびしいが、内需は期待できそう」「金利は下り、物価は安定し、消費購買力は盛り上がる」「省力化、省エネ化の投資は急増し、民間投資主導型の活力ある景況」等々である。確かに最大の難物である石油問題も、イラン・イラク戦争の終結、節約による需給バランスの回復、加えて円高による有利性などで、マイナスの波乱要因は見当たらない。何しろ、昭和40年の山一証券事件、46年の円切り上げ（自由化）の重大事件も逆に高度成長へのはずみにする程のしたたかさ、さらにあの48年の石油ショックによる構造不況、おそらく二十年は不況がつづくと思われたあの深刻な不況が、数十兆円の国債発行という奥の手を使ったとはいえ、四年間で克服でき、54年には再び40ドル原油時代という非常時におそわれながらも、強引な輸出戦略で辛くも克服し、今年を迎えたのである。

歴史というか、現実というかこうした成功の実績をみれば、日本という国のもつ、政治・経済・文化・結束力の総合力が世界各国のもつ力よりも比較優位であることは明白である。多くの弱点をカバーする力とは何か。その不思議な力は永続するのだろうか。楽観論者はその力が絶対優位と思いきこんでいるし、悲観論者はその力を本気で信じないで、ただ幸運がたまたま重なっているだけで、いづれ悲劇は訪れると恐れている。過去を重視するか、未来を重視するかによっても強気と弱気がわかることになるだろう。

国と国、産業と産業、企業と企業との関係は友好を結びながらも駆け引き、競争、対立、商いをくりひろげて、トラブルをカバーし合いながら何とか共存をつづけている。何となく大相撲の世界と共通した面があるようにも思われる。大部屋、小部屋、名門部屋に新興部屋、横綱を頂点とする階級分け、週刊ポストの特集ではないが、八百長、片八百長の戦術を駆使しなが

らあの大世帯を維持している姿。千代の富士ブームという。生意気そうなだけで迫力も何もなかったあの力士がたった半年で最高の実力者にのしあがったのだ。十両、幕下まで転落したのは、肩の脱臼や怪我、致命的な軽量によるものでいづれ消えてなくなるというのが大方の予想であった筈。

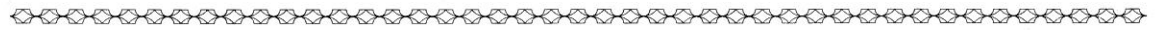
無資源国「日本」、過密・公害王国「日本」、「モノマネ日本」欠陥だらけの日本は、ついこの間までの千代の富士そのものであった。体重をふやすために禁煙した。公害を減らすために技術開発投資をし、きびしい規制を強行し、それが燃費良好な小型車を世界に供給し、経済を維持している。肩の脱臼を防ぐために、猛烈な腕立て伏せ、バーベル訓練、筋肉によって脱臼部分を固める自力療法、それはあたかも、小集団活動（QCサークル、ZDグループ活動）によって無欠陥製品をつくりあげる全員参加経営の日本的経営そのものではなからうか。また大物に勝てるようになったのは、出足、低くつっこみ、前みつをとり一気に攻め込む。その気力、集中力に、鈍い大物が圧倒されるからなのではなからうか。日本経済の気力は、総合商社に代表される積極的なマーケティング努力である。優秀な人材が商社めざして殺到する姿は先手必勝の相撲道に相通じ心強い限りである。

もう一つ目立つことは千代の富士の重心の低さである。大方の力士は彼の低さに合せようとすると自分の体重とアンバランスな体型によってつんのめって前に落ちてしまう。横綱「輪島」も「北の湖」もその低さについて行けず、イヤイヤ前にバツリである。重心を低くすること。それは巨漢高見山に見るように大物ほど困難である。小型でありながら誰よりも重心を低くしながら頭をつけて相手をふりまわす、その力強い機動力、それこそ猛練習によって培われた千代の富士の得意技なのである。まさしくそれはマイコン革命を実用化したエレクトロニクスを戦略産業に、家電にカ

メラに自動車に活用し、第二次産業革命をリードしつつある日本経済そのものである。今まで横綱輪島関は彼をカモにしていた。がっぷり四つに組んで堂々と投げ飛ばそうとする千代の富士の過信、おごりを逆に利用し、グイと吊り上げ土俵外につまみ出すのである。千秋楽の最初の北の湖との一番で、千代の富士の堂々と四つに組んで勝ちたいという「おごり」をつかれ、大きな腹の上のにせられて吊り出され、決定戦では、謙虚に低い姿勢で得意技を發揮し優勝を獲得したのである。恐るべきは、自己の実力の過信であり、おだてに乗ることである。日本経済も世界一うまいっており、日本的経営は世界のお手本であるという自画自賛である。常に何かを目指し、何かにおびえ、何かをつかもうとする本能的研究心が、今日の日本の産業、企業をつくり上げてきたものであり、もう学ぶものはなく、教える快感にひたりたいなどという大国根性がはびれば未来の運命は暗い。横綱の引退を暗示してい

るようなものである。日本自体も、企業自体も、あくまで小兵なのであって、気力とトレーニングと低い重心に頼る以外はないのである。

問屋センターが日本一であり、加賀友禅が最高の人気であろうとも、油断は大敵である。隆盛を誇った九谷焼も山中塗も現在は苦境にある。横綱相撲で受けにまわり人気におぼれたとは言わないが、大関千代の富士に喰われる隙があったのではなからうか。輪島塗はなかなかの執念で日本一の座を守りつづけている。真似のできない材質と技術と販売網の他に、三万の輪島市民の団結力がこれを支えているのである。はたして、日本全体の団結力は産業・企業を力強く守り育てようとしているのであろうか。自らの「おごり」が大敵であるだけでなく、味方のチーム・ワークや相互扶助の精神がこれからの日本の将来を左右する課題となるのではあるまいか。



## 金沢問屋センター百貨同業会

### 年忘れ家族懇親会

毎年恒例の百貨同業会の年忘れ家族懇親会は、昨年12月15日(月)午後6時より、金沢シティホテル二階宴会場で盛大裡に開催された。本年は特に御婦人方や子供さんの同伴出席が多く、久々にお会いする人々もあって組合員相互の親睦と、家族の懇親を一層深めた良き一夜でありました。会は先ず辰川会長の挨拶にはじまり富木副会長の「乾盃」の音頭によって開宴、ホテル専属のバンド演奏と、ミノルホン歌手加賀ひとみの歌謡曲、子供達にモテモテの「手品」等、大変バラエティにとんだ進行の内に、もっとも絶賛を博したのは、何と言っても、越原有希子(8才)、越原真希子(5才)ちゃん姉妹によるバイオリン演奏で、大人顔負けの腕でした。宴もたけなわになるにつれ、当日のハイライトである「競馬レース」!!

各テーブルより選出された10頭(?)の代表馬は、思惑買いの馬券を求めた人の熱狂した声援をバックに、餌(豆)をたべる競走に「アタック!!」の結果、(憐)川助の川端専務が豆三粒の差で優勝しました。売出された馬券は、そっくり(交通遺児を励ます会)に寄付する事になりました。

引続き全員による福引抽籤会を行い、盛沢山の景品が渡され、和気あいあいの内に高桑副会長の閉会の言葉を最後に、名残りをおしみなながら散会した。

